



ストリング・ゼム・アロング

文=ジョージ・カックル

第11回

ラジオ/DJを題材にした曲あれこれ

メリカン・グラフィティ』(73年)にも、DJ役として自分の名前で登場していた。この曲には、ウルフマンの実際の声が入っている。曲はサビから始まり、そこではこんなことを歌っている。ウルフマンに拍手、彼は君のレコードを高く評価してくれる。死ぬまで彼のことは好きだろう。サビの合間にも何回かウルフマンの声が入る。ヴァースで主人公は、彼女と車でドライブしながらキスをさせてと口説くが、その娘は全然のつてくれない。ここでウルフマンの声が出てくる。Oh you know, she was diggin' the cat on the radio. 彼女が君を好きだと思っけていても、実はラジオに出ている男(=ウルフマン)が好きなんだよ。この曲の中のウルフマンのセリフは、彼がラジオでよく使うフレーズばかりだ。例えば、As long as you got the curves, I got the angles. 君が曲線を持っているなら、ぼくは角度を持っているよ。ここにでてくる、curveは△曲線、女性の身体ラインのことも指す。角度を持つは、違う角度から見ることができ、つまりウルフマンが、俺にはその女性を落とせる技があると言っているんだ。女性も含め、結局はみんなラジオから流れてくるウルフマ

60〜70年代、日本で過ごしたロック好きは、米軍キャンプからのAM放送局FEN (Far East Network) を聞いていただろう。当時のFENは、ロックやカントリーのトップ40ばかりかけていた。友人のムッシュカマヤツから聞いた話では、60年代の頃は1時間に1回かかる最新のヒット曲を、ギター片手にラジオの前でじつと待っていたそう。その時代は現代と違って、ラジオを録音するのは不可能に近かった。カセットもまだなかったからね。ラジオで曲がかかったら、ギターでその曲のコードを探し、必死で歌詞を覚える。3分のヒット曲をその場でコピーできなければ、また1時間待つしかない。そしてその曲は、最初にディスクで演奏したバンドのものとなる。だいぶ歌詞は間違っていたそうだけども(笑)。俺もFENにはだいぶ世話になった。75年、新宿から鎌倉に戻った頃は旅行のため貯金していたので、土曜の晩も遊びに出ずFENを聞いていた。好きだったのは「チャリー・ツナ」というDJの名前がついた番組。彼は夜8時から9時の間、その週のヒット曲をかけていたから、ラジオを風呂場を持ち込み1時間たつぷり番組を聞きながら湯船につかった。だから風呂上がりは、



Donald Fagen "The Nightfly" Warner Bros. [US] 9 23696 -1 [1982] Warner ©WPCR75172 incl. "The Nightfly"

ンの声が聞きたい。だから、誰も彼には勝てない。ウルフマン自身も何回かゲス・フーとツアーに出て、生でこの曲をやつたらしい。一度、観てみたかったな。

DJが主人公の曲を紹介しよう。ステイ・リー・ダンのドナルド・フェイゲンが、82年に出した大ヒット・アルバム『ナイトフライ』(全米11位)の表題曲。アルバムジャケットでは、彼がDJのポーズをとっている。そして、そのDJによる番組のスタイルは、曲と曲の合間にリスナーからの電話に応える、という設定になっている。曲の始まりはこうだ。I'm Lester the Nightfly, Hello Baton Rouge, Won't you turn down your radio, respect the seven second delay. 僕はレスタールというナイトフライ。ハロー、バトン・ルージュのみんな。ラジオのヴォリュームを少しばかり



The Guess Who "Road Food" RCA Victor [US] APL1-0405 [1974] conoclassic [US] ©ICON1029 incl. "Clap For The Wolfman"

しよっちゅう目が回って倒れてたよ(笑)。チャリーはいつも下らないダジャレを飛ばしていた。番組のキヤッチフレーズも、Stay Tuned. リチューニングはそのまま。ツナにかけて、Stay Tuned. と言った。その影響で俺のインターFMの番組「LAZY SUNDAY」がダジャレだらけなのかも。というわけで、今回はラジオに関係する曲を集めてみた。アメリカでは、いかにラジオが人々にとって身近で生活に深く関わっているかが分かってもらえるとと思う。

まずはゲス・フーが『ロード・フード』(74年)からシングル・カットした「クラップ・フォー・ザ・ウルフマン」。母国カナダでは4位、アメリカでは6位を記録した。アメリカのラジオというと、一番有名なDJはきつとウルフマン・ジャックだろう。彼はあのジョージ・ルーカスの青春映画「ア

下げて。7秒のデイレイにご理解を。この「nightfly」は夜に飛ぶ蛾だが、夜間に活動する人という意味もある。△ヴォリュームを下げて▽と言うのは、リスナーと生で話すときは音量を低くしてもらわないとハウリングが起きて聞こえなくなってしまうから。△7秒のデイレイ▽とは、アメリカの生放送のラジオ番組でよく使われる手法で、リスナーが電話口で放送禁止用語を言ってしまった場合、そこにビープを入れるための間のこと。△何? 木の中に住んでいる人種がいると? 厳しい法律を作った方がいいと、あなたは仰るのですね?▽。こんな電話が一晚中かかってくる。夜中の番組には変わった人たちからの電話が絶えない。次のサビは、△インディーのラジオ局WJAZ. ジャズと洒落た会話を、ベルゾーニ山の麓から▽。この部分はステーション・コールだ。でも調べたら、バトンルージュの街にはWJAZもベルゾーニ山もなく、架空の話のようだ。ジャズをかけるからWJAZなんだらう(ジャケにはソニー・ロリンズ『コンテンポラリー・リーダーズ』が)。ロック中心の局をWROKにした、かけるジャンルを名称にすることは多い。このDJは、オールナイトでやっている

らしく、ジャケ左に写っている時計の針は午前4時9分を指している。次のヴァースでは、『コーヒーもチェスターフィールドのキング・サイズも、たっぷり用意してあります』とある。『Java』はコーヒーの名産地だが、アメリカではコーヒーそのものこと指すことが多い。『Chesterfield』は、30〜40年代によくラジオ番組のスポンサーだったブランド。ジャケにもチェスターフィールドの箱が写っている。次のヴァースでは、フレイゲンが作った架空の商品。パツトンのキス&テルのコマーションを歌詞にしているが、こんな感じでDJは朝方まで一人で仕事をこなすんだ。スタッフもいないから、電話をとってレコードをかけてCMを流してしゃべり続ける。そんな深夜のDJブースの光景が見事に描かれている。

68年、バーズをやめたジーン・クラークは、バーズのツアーにサポートとして参加していたダグ・ディラードと一緒に、ディラード&クラークというユニットを組んだ。最初に出した『幻想の旅 (The Fantastic Expedition Of Dillard & Clark)』はチャートには上がらなかったが、カントリー・ロックの名盤のひとつだ。にもかかわらず、



Dillard & Clark
"The Fantastic Expedition Of Dillard & Clark"
A&M [US] ● SP4158 [1968]
◆BGO (クリンク)
©CRCD3536

incl. 'The Radio Song'

バーズのカントリー・ロック・マスターピース『ロデオの恋人』が2か月前に出されたその陰に隠れてしまったため、『幻想の旅』は当時あまり話題にならなかった。

この作品に収録された『ザ・ラジオ・ソング』は、ジーン・クラークとバーニー・レドンの共作。冒頭に『メンフィルから15マイル、標識にはそうあったと思う。病んだ心を癒すため、明日に向かってドライブする』とあるように、彼女にフラれた主人公の放浪の旅を歌った曲。『コロラドに着いたら、もう振り返ることはしない』と決めたのに、『彼女にもう会えないなら、気が狂ってしまいたい』などと、主人公の苦しい心持が表現されている。僕はラジオを聞いていた。次々に曲がかかるけど、過ぎ去った恋についての歌ばかり。ラジオに関して出てくる箇所は少ないが、カー・ラジオを聞きながらむなしい旅を続ける主

大きくはつきりと受信できるといういわね。あなたはすぐに退屈を誘うような弱い女は嫌いでしょ。あなたの嘘をすぐに見抜くような強い女も好きではないんでしょ。▼意中の男性は、何人かの女性に移りしているようだ。黒い雲とは、男のそんな状況の喩えなのか。曲の主人公は、『もし(私の電波の)受信が悪いなら、私を消してね。あなたには静けさが必要だから』としおらしい面を見せつつ、『トランジスタ・ラジオを聞きながら海辺に寝そべっているなら、砂にいる虫なんて追い払って。愛はずっと流れ続けている。あなたの頭が忘れろと言っても心がまだくすぶっているようなら、私の局を呼び出して』と迫る。最後の『The lines are open』(回線は空いている)は、ラジオ局がリクエスト用の電話番号が空いているというようにときに使う言い回し。女性の恋の駆け引きに対する感情がよく出た、いかにもジョニらしい曲だ。

最後はラジオ番組が持つパワーを考えさせる、ウォーレン・ゼヴォンの『モハメッドのラジオ』。『モハメッド (Warren Zevon)』(76年)の収録曲で、リンダ・ロンシュタットが『ミス・アメリカ』(78年)でカヴァー



Warren Zevon
"Warren Zevon"
Asylum [US] ● 7E1060
[1976] ◆ Asylum/Rhino [US]
©R2 512737

incl. 'Mohammed's Radio'

していた。モハメッドというDJのラジオ番組を聞けば、どんな人でも癒されて元気になるという内容だ。最初のヴァースは、『みんな落ち着きがなくそわそわしている。行くあてもなくイライラしている』と始まり、『いつでも誰かが、とっくに知られていることを誰かに言おうとしている。だから怒りが生まれ憎しみが溢れ出る』と続く。そして『But don't it make you want to Rock And Roll all night long?』そうなる。と一晩中、ロックンロールしたくなる、と歌われる。そんなとき、モハメッドのラジオ番組から甘くソウルフルな歌が聞こえてくる。『rock and roll』には、元気出せ、やり続けよう、頑張ろうという意味がある。戦場で相手に突っ込んでいくときも、バスケの試合でスタジアムに入っていくときも『ロックンロール!』と叫ぶほどだ。

次のヴァースは、社会の階級には関係な

人公の姿が目には浮かぶ、とても美しい曲だ。

●

ジョニ・ミッチェルにも、ラジオを思わせる言葉をちりばめ、恋の世界を歌っている曲がある。72年の『バラにおくる (For The Roses)』からのシングルで全米25位にまで達した『恋のラジオ (You Turn Me On 'I'm A Radio)』だ。自身をラジオになぞらえ、恋人に愛を訴えかける歌。『Turn On』はラジオをつけるときにも使うが、ここでは、『私を興奮させる』という意味だ。

▲黒い雲の下で、あなたが街へとドライブするなら、あなたを愛してくれそうなところにダイアルを合わせてね。あなたは私を興奮させるの』と曲は始まる。車社会だから、自動車とラジオは強く結びついているんだ。『dial in the number』は、人の心に合わせるというようににも使う。

▲私はあなたに電波を送る放送タワー。



Joni Mitchell
"For The Roses"
Asylum [US] ● SD5057
[1972] ◆ アサイラム (ワーナ)
©WPCR14097

incl. 'You Turn Me On 'I'm A Radio'

く、色んな人がモハメッドの番組を聞いて癒される、という内容。誰かにその怒りを向けるかもしれない問題を抱えた保安官も、街を歩く変人も、音楽を聴いて顔が明るくなる。次のヴァースでは、『みんな一生懸命に生きようとしているけど、どんなに頑張ってもガソリンをかうお金が作れない。でも、モハメッドのラジオを聞いて慰めを得る。みんながラジオから流れるドラムの音を聴いて、もっと正しい世界になってほしい』。そして曲は、『將軍が彼の部下に囁いた。モハメッドのランプには気をつける』という歌詞で終わる。『lamp』は道を照らすという意味で、『アラビアン・ナイト』にも引つ掛けている。人生を導き人々を高揚させるモハメッドのラジオに注意が必要だという権力者の危惧の言葉の裏に、ラジオが持つパワーの大きさが表現されている。

俺は今、ラジオ番組をいくつか持つてDJという仕事を楽しんでいるが、若い頃はラジオDJになるうとは思わなかった。ラジオDJは、ミュージシャンになれなかったナード(『おたく風』)がやる職業だと思っていた。でも始めたら楽しくて、何年もDJを続けている。俺もモハメッドみたいに、ランプを照らしているのだろうか。